

「書物の装訂[冊子装]のルーツ」

大内田 貞郎

元神戸親和女子大学図書館長

現NPO法人書物の歴史と保存修復に関する研究会 理事

※この論文は、2009年夏期講座（NPO法人書物の歴史と保存修復に関する研究会主催）における大内田貞朗理事の講演の内容をまとめ、一部加筆していただいたものです。

はじめに

本日の演題は「書物の装訂[冊子装]のルーツ」と致しております、この「冊子装のルーツ」について、私の思い描いております一端を御披露致したいと思います。

さて、「書物装訂」の歴史を遡って参りますと、私共日本人には、この「冊子装」の他に「卷子装」（「卷子本」・「巻物」）をも身近に感じていらっしゃる方も多いのではないのでしょうか。まずこの「冊子装」について、最初にご紹介致したい言葉に、フランス文学者で文藝評論家の清水徹氏には次のような記述があります。

「紀元二～三世紀ごろにおける、現行の書物の形態を決定したページを重ねて片側を綴じた冊子体の発明は、[書物の装置]という視点から言えば、グーテンベルク革命 - 十五世紀における活字印刷の発明 - よりはるかに重要なのではないか。」（『書物について その形而下学と形而上学』/清水徹著 岩波書店 2001年刊 p. 12）

大変大胆な発言ではありますが、私もこの一文を目に致しました時、即、両手を挙げて同感致しました。つまり、ここに取り上げようと致しております「冊子装」の発明は、何と！“グーテンベルクの印刷革命”より遙かに重要なのではないか“と云うことでもあります。

私共の「書物」への認識は、この「冊子」の形態をごくごく当然のこのように、殆ど無意識に接しておりますが、実は常日頃目に馴染んでおります「書物」の源流を遡りますと、そこには当然の事ながら、ちゃんと歴史(必然)があるものだとの思いがあります。

したがって、このような「冊子装」への認識によって、それへの「歴史」、或はその「ルーツ」を辿ってみようとの誘惑にかられましたので、タイトルを「**「冊子装」のルーツ**」と致した次第であります。

この原稿についてお断り致しておきたいのですが、内容の正確さ(誤解無き様)を期すべく、引用文がやたらと多くなっておりますので、大変お聴き苦しいところはどうぞ御寛恕戴きますようお願い申し上げます。

まず、本題に入ります前に、ごく初歩的な事に相成りますが、「**書物の定義**」について、壽岳文章先生の『書物の共和国』には次のような記述がありますのでご紹介致しておきます。

「形態的には、自然のままの、または加工した適当な物質的材料を選び、その面の上に文字や図様を筆写、または、印刷したものを有機的に配列し、保存または運搬に適するよう、その材料の性質が要求する方法で、“ひとまとめ”にしたものをいう。」(『壽岳文章・しづ著作集第6 書物の共和国』/壽岳文章しづ著 文秋社 1986年刊)

とありまして、「**書物の装訂**」とは、その「**材料(素材)の性質が要求する方法**」に従う事で、その形態(装訂)が決まるのだと言うことでありましょう。それを「ひとまとめ」に出来ることが条件として、具体的に代表する素材を辿ってみますと、

- ・ 西欧＝粘土(タブレット板)・パピルス・パーチメント(羊皮紙)・紙
- ・ 東洋＝竹・木・帛(絹)・紙・バイタラ(インド)

が使用されておりましたことは、すでにご存じのところであります。

この内、「粘土板」を除き、その他の素材はそれを「ひとまとめ」にするのに、「糊」や「紐・糸」を使って素材の性質に組み合わせて「**卷子装**」や「**冊子装**」が出来上がっておりますことも、すでにご存じのところであります。

それでは早速本論に進めて参ります。

「冊子装」のルーツ

「冊子装のルーツ」まで遡ろうと致します場合に、私が最も頼りに致しております参考書、それは F.G. ケニオン博士の『古代の書物』であります。その「まえがき」によりますと、

「とくにパピルスが書物の主な材料として用いられていた時代に関すること」と、「原則として、圖書学的に、ホメーロス時代から、紀元四世紀において皮紙がパピルスにとってかわるに至るまでの書物の作り方にある。」（『古代の書物』/F.G. ケニオン著 岩波新書 1953 年刊 1991 年第 3 刷 p. i~ii）

と言うものであります。つまり、

◎「パピルス」が使用された時代に関すること。（「ルーツ」に関わる時代）

◎「パピルス」が「皮紙」（パーチメント）に取って替わる迄の書物の作り方の記述が中心でありまして、ここには「冊子装のルーツ」に関わること、変遷の意義などが、实例を挙げて詳細に記述されております。

したがいまして、ただひたすら『古代の書物』によりながら、「冊子装」の源流・意義について、ケニオン博士の調査結果をご紹介致しながら、手探りながらも私流の読み解きを試みたいと思います。

さて「パピルス」による書物の装訂には、研究者によりましては「パピルス」には「冊子装」は存在しないとする説もある位ですが、ケニオン博士の調査に従って、「卷子装」と「冊子装」の具体的な形態を見て参ります。

「パピルスによる書物の装訂」= (1)「卷子装」(2)「冊子装」

(1)「卷子装」=[縦 33×23 糎。]一卷には 20 枚以上のシートを使用することなく、シートを横継ぎに貼付して、「卷子装」に仕立てる。最長は 405 糎。(同 p. 57)

パピルスの「卷子装」について、博士はまた、大変興味あることを記しておられます。「卷子装」の仕立て方について、

「巻物は字を書く前に仕上げられたことは明白である。文字が屢々シートの継ぎ目の上を走っているから、書き手はテキストを別々のシートに書き、後から巻物にするためにつないだのではない」（同 p. 61）

との指摘がありまして、さすがに書誌学者だと感心致しておりますが、実は日本でも奈良時代の写経所では、先に「卷子」に仕立てて後に「写経」を致しております。ただこれだけのことでありますならば、別に珍しい事でも何でもな

いことなのですが、日本においては、最初の印刷本「春日版」（寛治二年 1088c）の場合、この「パピルス卷子装」や「写経」と全く同様、先に紙継ぎを致し「卷子装」に仕上げた後に「印刷」する、いわゆる“巻き摺”（まきずり）という、大変特殊な手法を用いておりました、印刷発祥国中国では、これとは全く逆に、一紙（料紙）に「印刷」を先に終えて、その後に「卷子」に仕立てているのであります。この両書の違いを見分ける為に、私共は博士と全く同様の方法で、「紙の継ぎ目」に印字（文字）が懸かっているかどうかを確認して判断を致しております。些か横道に逸れてしまいましたが、「冊子装」に移ります。

(2) 「冊子装」 = 「同じ一枚は裂いたり、破いたりする恐れ無しに一度以上折り畳むことは出来なかった。そのためパピルス冊子本を作る方法は、各々必要な頁の大きさの数枚を取って、一度だけ真中から二つに折るにあった。」（同 p. 119）とありますことから、「パピルス」素材の特徴として、その素材の要求するところとは、「冊子装」の場合、「一度だけ真中から二つに折るにあった。」つまり、シート一枚を二つ以上に折ることは不可能（破損する為）な素材と言うことであります。

= 「パーチメント」について「パピルス」との違いを博士は、

「冊子本の「シート」或は「帖」を作るにあたり、「パーチメント」（皮紙）と「パピルス」の扱い方には根本的な相違がある。大きな皮紙の皮は縦横の両方に折り畳むことが出来たし、常にそうされていた。だから今日の紙の場合と全く同様に、二、四、八、一六枚で帖を形成した。」（同 p. 119）

と指摘、ここには「パピルス」と「パーチメント」との素材の性質の違いが比較してあるのですが、その内「パーチメント」の特徴として、「紙」を折り畳んで「折帖」を作る「現在の書物」の形態と全く同様であることを強調されておられます。と致しますと、「パピルス冊子装」の時代には、他に方式を異にする「パーチメント冊子装」がそこに重なりを見せていることとなります。即ち「二つ折り」の形態でしかあり得ない「パピルス」と、「縦横両方に折り畳む」ことの可能な「パーチメント」という、「素材」と「折」の形態には、明らかに二種類の異なった「冊子装」の存在が浮上してくるのであります。

したがって、当時「素材」の違いによる、全く方式を異にする「冊子装」が並立していて、二種が厳然とそこに存在していたことを意味するのであります。私はこの「パピルス」と「パーチメント」二種並立の「冊子装」の存在に気付いて以来、この事に異常な程のこだわりを持つことになったのであります。

それは今まで、私も「パピルス冊子装」の詳細には全く無頓着であったのですが、この難解な『古代の書物』を何度も何度も読み返すうちに、「パピルス冊子装」の内にも形態の異なる装訂があることに気付いたからであります。

それは私が最初「パピルス」と「パーチメント」との関係を「シリーズ」（直列）として捉えて見ていたからであります。つまり両者の「冊子装」の在り様を、歴史的な流れの一環としての変遷の推移として眺めておきますと、そこには「素材」や「形態」の違い（対立）としてではなく、単に「パーチメント」は「パピルス」の延長線上（一連のものとして）に繋がっていて、両者の違い（対立）は、一見隠されるという、私の目には、西欧での「冊子装」の認識には「パピルス」を飛び越えて、「パーチメント」の方式に則っているもののみを、見ていたのであります。

さて、ケニオン博士は「パピルス」の素材の欠陥について、
「パピルスは年月を経、使用する間に縫い目から破れる傾向があった。それを救う、判り切った方法は皮紙の使用にあった。」（同 p. 129）

として、「冊子装」の素材の特質から、「パピルス」を「皮紙」（パーチメント）へとシフトする方向を指摘しておられます。この事柄は「パピルス冊子装」から「パーチメント冊子装」へと移行したということでありまして、当然、書物の世界から「パピルス冊子装」は現役からは引退して、姿を消す運命にあったということの意味し、忘れ去られる存在でもあったのであります。

そこで私は「パピルス」と「パーチメント」両者の関係を「パラレル」（並列）に捉える（対立）ことによって、そこには、まず極初期「冊子装」変遷の推移の在り様には、「パーチメント」以外にも「素材」の異なる、「一度だけ真ん中から二つに折る」という「パピルス冊子装」が、私の脳裏に新たに浮上してきたのであります。

と致しますと「冊子装のルーツ」を辿る場合、この「パラレル」の視点の中で、もう一步を進めて、「パピルス冊子装訂」のみが包含する形態を特定しておくことが必須であろうと考えたのであります。具体的には「パピルス冊子装」では「一度だけ真ん中から二つに折る」のみの素材をどのように組み合わせて「冊子装」を構成しているのかに注目したのであります。

このような視点を私が持ちました理由には、「冊子装のルーツ」についてその発祥（ルーツ）は、ただ一点にあると見ているからでありまして、そのヒントは、他ならぬカーター博士の、

「しかしこれに反対する見解、すなわちヨーロッパと極東のあいだにこのような交渉がある以上、さまざまな面で類似する技術が世界の二つの地域で全く独立して生まれたとする見解は、もはや信じ難い。いっそうの光明を追求する広い精神を持ちつつ、中国の影響が紙の使用に見られたばかりでなく、ヨーロッパの木版印刷術の導入に最終的な決定要因になったという見解を、作業仮説として受け入れてもそれは危険ではなかろう。」(『中国の印刷術2』/F.T.カーター著 平凡社 昭和52年刊「東洋文庫316」p.153)

という指摘によるものでありまして、「ヨーロッパへの木版印刷術の導入」は発祥が中国であろうとするカーター博士のこの見識は、まさに「冊子装のルーツ」を考える上にも同様に、同じ視点で同調出来るのではないかと確信致したのであります。

つまりそれは、中国への「冊子装」導入についても、「シルクロードの交易(行き来)」を中心に、「景教」の流入、「唐王朝の冊子装」への当時の評価などを斟酌すれば、

「ヨーロッパと極東のあいだにこのような交渉がある以上、さまざまな面で類似する技術が世界の二つの地域で全く独立して生まれたとする見解は、もはや信じ難い。」この言や、まさに「冊子装」の東洋への導入を見る上でも重要な視点として受け止めたと言うことであります。

したがいまして、東洋(中国・日本)への「冊子装」の導入があったとすれば、「パピルス」・「パーチメント」両形態の何れに導かれていたのかと言うことも新たに現出してきた問題と捉えたのであります。

それは東洋(日本)における「冊子装訂」の基本(粘葉装(胡蝶装)・縫綴装・線装本(袋綴装))が全て、一紙(シート)を「二つ折」にした「冊子」形態を採っているからであります。つまり、東洋では「パーチメント」の装訂では決してなく、この「一度だけ真ん中から二つに折る」装訂を特徴とする「パピルス冊子装」の形態がそのままに最も近い形で導入されているのではないかと私は見たのであります。

したがいまして、如上の思いから「パピルス冊子装」における形態の在り様にのみ視点を据えて見ようとここで考えたのであります。

さて、それでは「パピルス」の素材の性質(特質)の特徴が、「冊子装訂」に、どのような形態を齎していたのでしょうか。

「パピルス冊子装」に見る形態の種類

まず「パピルス冊子装」の内には、基本的には三種類の形態が存在致しているとの認識を私は得たのであります。それを著者ケニオン博士の調査によりまず順序そのままに従いますと、

- ①「**余りひどく不便を感じずに折り畳み得るならば何枚でもよいが、一つの大きな帖。この場合、冊子の前半では「裏」が「表」に先行し、後半では「表」が「裏」に先行する。**」（『古代の書物』p. 124）

「『ヨハネ傳』（三世紀頃写？）は二十五枚から成り、折った時には五十葉、百頁を成し、全体は中央で垂直の線上に貫いた孔に通した糸で綴じ合わされた一帖を意味することを示している。」（同 p. 120）

- ②「**普通八とか十とか十二程度の少数の葉から成る帖の連続。（多帖本 multiple-quire）**この場合、各帖の前半では「裏」が「表」に、後半では「表」は「裏」に先行。」（同 p. 124）

- ③「**一枚のパピルス（シート）を折って出来た、たった二葉の帖の連続。一略—これは前の二つの方法のいずれにも見られない、全冊子本を通じて「表」は「表」、「裏」は「裏」にむかい合わされるという効果がある。**」（同 p. 124）

①～③の年代的順序

「パピルス冊子本の年代的発達を辿るには現存の証拠では充分ではない。しかし、大きな一帖①の形式も、二葉帖③も共に初期の試みで、結局八、十或は十二葉に道を譲ったと見るのが当たっているらしい。これは後期のパピルス冊子本（五～七世紀）が後者の種類②に属しているという事実によって支持されている。」（同 p. 124～5）

とありまして、「パピルス冊子装」には明らかに三種の存在が、ここに指摘してあるのです。その結果、時代順として、③「一シート二つ折」・①「一折の帖」とが初期の試みで、②「八、十、十二葉帖の連続」（縫綴装）が後期（五～七世紀）の「パピルス冊子装」であったということでもあります。

したがって、三種ある内「パピルス」最終の「冊子の形式」は②の帖、「縫綴装」（綴葉装）であったと言うことになるのであります。

この装訂は私共にも馴染みの「冊子装訂」（縫綴装：綴葉装）であります。（現在使用の糸綴り本の祖先に当たる）

それから、特に②③の引用文には「連続」と記してあるのですが、それは出来上がった「帖」を重ねて貼り合わせる・綴じ合わせると言う意味に解してよ

いのではないかと思います。そして「表」「裏」とありますのは、シートの内折れ(谷折れ側)の面(見開き)を「表」、二つ折シートの外側(山折れ側)を「裏」と呼んでいるようです。「パピルス」による三種類の装訂につきましては、再度「日本」の項でも改めて触れることになります。

次に「パピルス冊子装」への「書写方法」に関して、特に注目すべき興味ある指摘がありますのでご紹介しておきます。それは、

「[パピルス]年代の一番古いのは大英博物館蔵、ホメーロス『イーリアス』第二～四巻の写本で、第三世紀に属するように見える。これはまるで書き手が冊子本のやり方に慣れていないで、その利益を認識しなかったかのように、各々の葉の片面にしか書いていない。」(同 p. 113～4)

と言うものであります。ここで注目すべきは「各々の葉の片面にしか書いていない。」とするものです。ただ具体的にはその「書物の装訂」そのものが明示されておりませんので、「片面書写」による書物の形状は全く不明なのであります。私共東洋人にとっては、一紙に片面摺してその摺り面を内側(谷側)に折り込んだ「胡蝶装」仕立ての「北宋版」を彷彿させるものがあります。

つまり、「片面書写」の『イーリアス』(第二～第四)と「北宋版」とは「書写」と「印刷」の違いこそありますが、仮に両者が類似の形態であろうと想定致しますと、『イーリアス』の装訂は「一シート二つ折」する、いわゆる③に属する「粘葉装」ではなかろうかと想像致します。無責任を覚悟で申しますと、「片面書写」とは物理的には「裏白」となるものでありますので、この現象は将来「卷子装」の特徴でありますことから、元々「卷子装」であったものを、何らかの事情があつて特別に「冊子装」改装への必要上、同一巾に切り離し、そのシートを二つ折りとして、急遽③「粘葉装」に改装したのではないかと想像致しておりますが、果たして如何なものでしょうか？ 何れに致しましても「原本」の成り立ちを直接見てみたいものであります。申すまでもなく、「冊子装」は「両面書写」が原則であります。

ここまでは「パピルス冊子装」の内にも、三種類の形態が存在していたことをご紹介致しましたが、ケニオン博士は、最終的には糸で綴る②「縫綴装」(綴葉装)に移行していただろうことを指摘されていますことから、五～七世紀以後の「パピルス冊子装」は、原則②「縫綴装」であったということでもあります。

「冊子装」普及の貢献者

さて次に、「卷子装」を「冊子装」に取って替わらせ、それを普及させた貢献者とは一体誰だったのでしょうか。これもケニオン博士によりますと、

「エジプトでチェスター・ビーティ氏が入手した一群のパピルスがあった。それは十二の写本よりなり、すべてパピルスに書かれ、すべて冊子本で、すべてキリスト教文学を含み、十中八九初期の教会か僧院の文書の遺物である。年代は、第二世紀から第四世紀か、五世紀にわたっているらしい。—略—それはキリスト教団が夙くから冊子本の形を使用していたことを強く確立する。」

「パピルス冊子本の起源と、少なくともキリスト教徒による使用は二世紀初頭まで遡るのである。」 (同 p. 116-7)

「冊子本式の本製造の導入にキリスト教徒が少なからずあずかって力があつたと考えるのが公平である。」 (同 p. 115)

との重要な指摘がなされております。それは、

- 1) 「「パピルス冊子装」の起源と、キリスト教徒による「冊子装」の使用は、二世紀初頭まで遡ること。」
- 2) 「初期の教会か僧院の所蔵文書は、ほぼ「パピルス冊子装」で、キリスト教文学を含み、それらの年代は、第二世紀から第四世紀か、五世紀にわたっているらしい。」
- 3) 「「パピルス冊子装」方式の書物製造の導入には、キリスト教徒の存在が大変大きく関わっていたこと。」

と言うことでありまして、ここには「パピルス冊子装」の普及に多大な貢献を成したのは、唯一キリスト教団であったと言うのであります。

さて、この「パピルス冊子装」と「キリスト教団」の関わりにつきましては中国の項にも出て参りますので、是非ご記憶にお止め置き下さいますように。

「キリスト教徒」が「冊子装」を必要とした理由(事情)

では、なぜ「キリスト教徒」がこの「パピルス冊子装」に集中させて、それを必要としたのか、その事情(理由)とは一体何だったのでありましょうか。それは、

「パピルス冊子本の経験は、一つの巻物より、一つの冊子本の方に遙かに多くのテキストが入れられることを示した。チェスター・ビーティ写本は、『四福

音書』と『使徒行傳』が巻物だったら、五つの別々の巻物を占めたであろうところを、ただ一冊の冊子本に容れ得たことを示している。」(同 p. 129)

とありまして、私にはこの一件が、「冊子装のルーツ」を考える上で大変重要な示唆を与えられることとなりました。それはキリスト教団が、テキスト(『四福音書』・『使徒行傳』)を書写するのに、「卷子装」を使用致しますと、五巻分の卷子が必要となりますものを、「冊子装」に書写致しますと、一冊で全て盛り込むことが可能になったということでありまして、物理的には数量が「卷子装」の五分の一、「冊子装」は「両面書写」で成り立っている為に、より多くのテキストを盛り込むことが可能で、そして携帯性が優れていること、その「閲読・検索」が至極容易く出来ることでありまして、キリスト教団にとってこの「冊子装」は、大変大きなメリット、また必要欠くべからざるものであった筈であります。

またケニオン博士はここには触れていらっしゃいませんが、何よりも「卷子装」は料紙片面のみの使用であるのに対して、「冊子装」の特質とは、「両面書写」である点に尽きるということです。換言致しますと、「冊子装」には、「卷子装」よりも料紙両面を使用の為、単純に申して、倍の積載量があること、「キリスト教徒」は“必要に迫られて”、その特質にいち早く着目した、そして時代的にも、将に「冊子装」使用の先駆者であったと言うことになるのでありましょう。

「パピルス冊子装」のルーツ(源流・先祖)→「蠟板・皮紙」

最終的には、「パピルス冊子装」のルーツを「蠟板・皮紙」に求めようとするということについて、「冊子装」の「綴じ」に関わる重要な記述があります。まず「ノート・ブック」(皮紙)の使用方法として、

「皮紙はすでに本の世界において重要な二次的な位置を占めていたのであるが、その主な用途はノート・ブック(メモ帳)としてであったらしく、公表すべくパピルスに托する前に、文学作品の準備に廣く使用(下書き)されたことは疑いが無い。」(同 p. 108)

とされ、

「携帯することが出来て、時折の覚書や詩の草稿に用い得るノート・ブックの使用に関する言葉は屢々見出される。」(同 p. 108)

とし、

「これらノート・ブックについては、本の冊子型の発達に関係がある。」(同 p. 108)

との指摘がありますが、とりわけ「蠟板」に関して、

「普通これは木(板)で、蠟をぬって(蠟板)、鉄筆で書くもの 一路 一枚以上の板が用いられた場合には、紐や革紐で縛り、封印した糸で、点検されないように封をすることが出来た。すべてこれらの習わしは、皮紙や冊子本即ち、現代の折り畳み式の本を探り入れる道をひらいたが、」(同 p. 109)

との指摘がありまして、「冊子装のルーツ」を考えます上で、特にこの「蠟板」の記述は卓見かつ重要、示唆に富むものとの認識を致した所であります。

つまり、複数の木板(蠟板)を縛る為には「紐」や「革紐」が必須の部品であったということでありまして、「現代の折り畳み式の本」との関連を指摘されておりますように、私共が、今現在使用致しております糸綴りの書物「縫綴装」すべてのルーツは、将にこの一点にあるということでありまして、換言致しますと、複数の「蠟板」は、必要欠くべからざる「紐」を使って“ひとまとめ”にしていたと言う経験が、「パピルス」や「皮紙」による「冊子装」を成り立たせる為の、「紐」や「糸」で綴じる(綴る)という行為に多大なるヒントを与え、この経験から「冊子装」形態での「糸綴り」という方式を編み出していたのではなかろうかということであります。

もう一点、基本的に最も重要であろうと想像致しますことは、そもそも「冊子装」の形態が「四角」(方形)であるという現実、つまり「蠟板」の形態がこれも将に「木」の素材の性質に従えば「方形」であったことによる模倣であって、「冊子装」は「卷子装」から直截に派生したと致しますことよりは、むしろ、市民生活の中、実用に必須の道具(「蠟板」を描いた絵(ナポリ博物館)が『古代の書物』に掲載され、またポンペイの壁画にも描かれている)を通してであった、身近に、常に見慣れていた「蠟板」の外形(四角)と糸綴りを、「パピルス」の素材にも直接取り込んで「冊子装」を創成させていったのではなかったのかということでもあります。

したがいまして、この事柄は、西欧は言うに及ばず、東洋での「縫綴装」(綴葉装)全てのルーツも、実は「蠟板」の在り様の、この一点(複数の木板を封印する為に必要不可欠な紐)にあるということ、私は認識するに至ったところであり、このことは将に“必要は発明の母”と申す如き結果だと見ております。

誤解を恐れずにもう一步踏み込んで参りますと、「冊子装」(「粘葉装・縫綴装」)の発生(ルーツ)は、少なくとも、東洋、とりわけ中国や日本にも同時に、又、並

列(パラレル)に存在していたと言うものでは決して無く、中国や日本の「冊子装のルーツ」(源流)を遡れば、それはただ一つ「キリスト教団」が必須とした「パピルス冊子装」(「パーチメント」ではなく)、それをもっと遡って「蠟板+紐」に行き着く筈、引いては中国・日本の「冊子装」までも、「蠟板」の延長線上にあるとの認識を、私はこの『古代の書物』から読み解いたのであります。

先にも引用致しましたカーター博士の、「すなわちヨーロッパと極東のあいだにこのような交渉がある以上、さまざまな面で類似する技術が世界の二つの地域で全く独立して生まれたとする見解は、もはや信じ難い。」

との指摘はまさにこの「冊子装」の東洋伝播にも及ぶ名言であろうと私は確信しているところであります。

中国における「冊子装」の存在(位置)

中国の「冊子装」につきましても、全て「パピルス冊子装」に端を発しているとの発言を致しました。一応、これを前提と致しまして、中国での「冊子装」への認識、或はその取り扱いはどのようになっていたのか、その辺りを探って参りたいと存じます。

中国に現存致します「冊子装」の年代は、八世紀を始め、九世紀末～十世紀と言われております。この「冊子装」受容について、田中敬博士は著書で次のように記していらっしゃいます。

「唐初既に景教が伝えられて居ったのであるから、中国の縫綴は西洋に学んであったかも知れず、綴糸のかけ方、表紙のくるみ方などから推して、此の仮定を可能ならしめるものが多い。」(田中敬著作集第五卷『図書形態学』/田中敬著 早川図書 昭和六十年刊 p. 151)

との指摘がありまして、将に「パピルス冊子装」の影響が中国に及んでいたことを示唆するものであり、当時日本の書誌学会からは、この説は全く無視され続けてきているのであります。

ここに「景教」が出て参りましたが、すでにご存じのことでありましょう、キリスト教の一派「ネストリウス派」のことでありまして、その中国名のこと。先にも申しましたように、「パピルス冊子装」と「キリスト教団」との深い関わりに触れておきましたことを思い起こして戴きましょう。

この「景教」につきましても、実は私も、最近岩村忍氏の著書で偶然知ることになったのであります。そこには、

「ネストル派が唐にはいったのは貞観九年(635)のことで、太宗はその後一寺を建立し、二十一人の僧を公認し、**經典を翻訳**させた。この寺はペルシャ寺と呼ばれた。景教は当時ペルシアの宗教と考えられていたことがわかる。」(『シルクロード—東西文化の溶炉—』(NHK ブックス 46)/岩村忍著 日本放送出版協会 1966年刊)

との記述があります。この中で、太宗が「**經典を翻訳**」させたとある文字が目飛び込んで参ったのであります。これは全く偶然ながら、当時私は『古代の書物』にカンカンになっております最中でありましたので、「**キリスト教**」の「**經典を翻訳させた**」とは、将に「**パピルス冊子装**」のキリスト教の經典の事だと両者を関係づけてしまったのであります。

と致しますと、この經典は恐らく「**パピルス冊子装**」だと見ておりました。これを中国語に翻訳と言うことでありますから、当然中国人も公的に、同席致していた筈で、「**冊子本**」を間近に目に致していたことは間違いないところでありましょう。七世紀頃まではエジプトではまだ貧しい人々の間で「**パピルス冊子装**」を使用していたらしいことから、この經典は恐らく「**パピルス冊子装**」だろうと見ております。

ここに「**經典を翻訳させた**」とあることに関連致すことですが、大阪十三にあります武田科学振興財団「杏雨書屋」で、「敦煌の典籍と古文書」展示会場において『**景教經典**』が展示されるとのことでしたので、早速見学に出掛けて参りました。実は「敦煌の典籍」とありましたので、ひょっとして「**冊子本**」ではないかと期待していたのですが、残念ながらその翻訳本は、やっぱり唐代(盛唐～晩唐)書写の「**卷子本**」でありました。

まさか当時の「**[景教]經典の翻訳本**」(原本?)がこんな身近で出会えるとは思いませんでしたが、では、なぜその「**翻訳本**」が「**卷子装**」であったのか、想像致しますのに、恐らく「**景教の原典**」は「**パピルス冊子装**」であったに違いない筈なのですが、中国での「**翻訳本**」が「**冊子装**」ではなく、現に「**卷子装**」として現存していたのには、これは単なる偶然ではなく、それなりの理由が中国にはあったのだと見ております。この件に関しては次項で見て参ります。

中国国内における「**冊子装**」の評価

ところで、中国における「**冊子装**」の評価(特質)について、井上進教授(名古屋大学)にその触りについて語って戴きますと、

「**歐陽修は、十一世紀の半ばごろこう言っている。〈唐人は蔵した書物はみな卷子本であったが、後になって「葉子」が登場した。そのつくりは今の「策子」のようになっている、およそ検索に用いる書物の場合、卷子とではしょっちゅう広げたりもどしたりしにくいので、それで葉子に抄写した。」**（『中國出版文化史』/井上進著 名古屋大学出版会 ‘2002年刊 p.93~4）

として、「冊子装」は「検索に用いる書物」との指摘がなされ、そして、中国では「卷子装」につきましては、

「**長い伝統をもつ卷子本は、唐人にとっていわば書籍の「正しい」姿であったはずで、新参の冊子型書籍はいかにも卑俗な、利便性のため書籍に備わっているべき典雅さを失ったものと感じられたことであろう。**」（同 p.94）

とされ、そして

「**この事実からして、卷子本を貴族的装訂、冊子本を非貴族的装訂とするのは、あなたがち[荒唐]無稽の談でもない。**」（同 p.94）

と指摘なさっておられまして、これは井上教授が、唐の時代の人々が「書物」に抱く心情をこのように描いていらっしゃいます。つまりそれを要約しますと、
・唐人(唐の時代)の所蔵した書物は、全て「卷子装」であったこと。後に「冊子装」「葉子」が新参ものとして登場し、それは「検索」に用いる書物の場合に重宝した。(利便性)

・「卷子装」は、唐時代の人々にとって、伝統的に「書物」の正統なる姿であって、「冊子型書籍」は卑俗な、典雅さを欠いたものと映っていたらうこと。
・如上のことから、当時の中国人の「書物」への思い入れとして、「卷子装」は貴族的装訂とし、「冊子装」を非貴族的装訂と評価していたということ。
というものでありまして、少なくとも唐時代までの人々にとって、「冊子装」は新たに参入した珍奇な装訂との認識であつたらうことと、当時の中国人にとって、見慣れていないと言うことで、嫌悪すべき品位の低い卑しい装訂でもあつたということでありましょう。

と致しますと、「冊子装」は中国で発明されたものではなく、ただ単に、外部より流入した利便性の高い装訂に、中国人が目にとめたものであつたらうことをこの点からも想像させるのであります。

ところで、中国人が「書物」の形態上、侮蔑する対象が「冊子装」(方形)の形態に向けられていたらうことを、間接的に窺わせる大変面白いユニークな「装訂」が中国に存在しているのであります。それは「龍鱗装」(旋風装)であります。

この「龍鱗装」につきましては、ここでは概略に止めまして、尚詳細は『書誌研のあゆみ』/私立大学図書館協会西地区部会阪神地区協議会 書誌学研究会(1992年・平成四)を是非御覧戴きますように。

この論文の著者は李致忠という方で、北京図書館司書だと伺っておりますが、**「唐代書籍の最も一般的な書写方法と装訂方式は、依然片面書写の巻軸装であった。こうして、一般的な装訂方式と検索の便利さとの間には大きな矛盾が生じた。いつまでも片面書写の巻軸装を採用していたのでは検索の便利さは得られない。また巻軸装を通り越して、別の新しい装訂方式を採用するにしても、新機軸を打ち出したりすることはむずかしいものである。そこでつまり、故宫博物院蔵の『唐写本王仁句刊補欠切韻』(呉彩鸞『唐韻』)のような書写、装訂形式が出現したのであった。「該書は」全部で5巻、およそ24葉。第1葉の片面書写を除いてその他の23葉は皆両面書写となっており、計47面ある。-略-「その装訂の方法は、書葉より少し幅広の長い紙を底紙(卷子装式台紙)としている。第1葉は片面書写で、底紙の右端に全体を貼りつけてあるほかは、残りの23葉は皆両面書写であるから、各葉右辺の文字の無い空行を使い、左に向かって、魚鱗が連なる様にずらして第1葉末尾の底紙の上に貼っていく。ずれて重なっているのを見ると、龍の鱗によく似ている。収蔵するときは初めのほうから終わりのほうに向かって巻いていく。外観はやはり、巻軸の形式である。-略- 古人はこの種の装訂形式を「龍鱗装」または「旋風装」といっている。」(『書誌研のあゆみ 1976-1992』/私立大学図書館協会西地区部会 阪神地区協議会 書誌学研究会編・発行 p.21)**

とありまして、ここにも唐代の一般的書物は片面書写の「巻軸装」であって、「検索に便利な装訂」とは、「両面書写」可能な装訂と言うことでありますから、所謂「冊子装」を指しております。ところが、当時(唐の時代)、「巻軸装」(卷子装)を通り越して、つまり、それを捨て去って独自に別の装訂、それは全く新しい「冊子装」の形態を採用することは、国内の伝統的威信から、中国人にとって、大変受け容れ難いことであったもののようで、現在故宫博物院に所蔵の「唐写本唐韻」(『唐寫本王仁句刊補欠切韻』、字書の種類)のような、表向きの顔(形態)は「卷子装」となるように、両面書写された葉子を、「卷子装」の台紙(「卷子装」に設らえた)に貼り付けた、ある種変種の装訂を編み出した、これがこの「龍鱗装」でありまして、これを仕舞います時には、通常とは逆に、「巻

子装」の右端から巻き納めますが、外見上は全く「卷子装」と何ら替わらぬ形状となる仕掛けでありました。

これは将に、「キリスト教団」が、「テキスト」を大量に盛り込む必要上、欠くべからざる物として「両面書写」の有効性に着目したのと同様、中国でも「冊子装」の形態には嫌悪感を抱きながらも、その伝統を極力損じさせないよう十分に留意しながら、そして当時流行致しておりました『唐韻』が「字書」の一種である為に、検索に最も有効な「両面書写」可能な冊子形態が、必須の事として求められていたという、この時期、中国人にとりまして、「両面書写」が必要上欠くべからざる物として、止むなく自己の面子を保つ為の装訂(苦肉の策)が、実はこの「龍鱗装」であったということになるのでありましょう。

いずれに致しましても、両者の共通点として、書物を利用する上で、「両面書写」可能な装訂、所謂「冊子装」が、中国人にとっても、それは将に「検索」する為に、必要不可欠な存在であったということでもありましょう。

したがって、「龍鱗装」とは、例えば、四角い(冊子装)顔を、丸めた顔(卷子装)にすぎ替えただけの、しかし、外見上は紛うことなく「卷子装」であって、四角い形態を外に晒さないことで、貴族社会の人々の抵抗感をも緩める効果を発揮した「装訂」であった様に思えるのであります。

と致しますと、「パピルス冊子装」と「龍鱗装」との関係は、外見上は全く異なっておりますが、むしろ実質上は「両面書写」である一部「パピルス冊子装」の延長線上にあるということにもなるのでありましょう。

繰り返しになりますが、中国に「龍鱗装」が存在致しますことこそ、「冊子装」を自ら生み出した國では決して無かった。つまり「冊子装」が中國自発のものでありましたならば、「龍鱗装」の存在理由は全く有り得なかつたと、判断致したのであります。

それでは、中国での「冊子装」が、貴族社会の人々に正式に認められたのは、何時の頃で、そして、その「装訂」とは、一体どのようなものだったのでしょうか。実は、その前に中国の伝統に関しての事柄を引用致しておきますと、『書物の出現 上』によりますと、

「この國(中国)では、すべての恩沢は宮中より発し、民に及ぶとする伝統が非常に強く、紙の発明も宮廷の宦官蔡倫に帰せられている。」(『書物の出現 上』/リュシアン・フェーヴル他著 筑摩書房 1985年刊 p. 153)

という一節があります。と致しますと、ここでの主題となります外形上の「冊子装」が公的に認められた、つまり、宮中に取り上げられました時期は、そもそも何時頃になるのかと言うことも必要でありましょう。

その前に、中国における「冊子装」の在り様は、印刷発明の事情に深い関わりを持つのではないかと私は見ております。森縣氏は、「卷子は印刷の発見を契機に先ず冊子時代に入ったと推定した」とされ、全てを受け入れる訳には参りませんが、印刷開始と時を同じくして「冊子装」の時代に入ったとする見解は、現実的には一面で核心を突いていると思います。カーター博士(『中国の印刷術』東洋文庫)にもその間の事情を語って戴きましよう。

まず、西暦 932 年、馮道(宰相)の上奏文に、

「漢代に儒者は尊敬され、経典は三種の文字で石に彫られました。(熹平四年(175)の石経のこと)唐代にも経典を彫った石碑が国学につくられました。我朝はなすべきことあまりにおおく、石に彫り、それをたてる仕事を興すことができませんでした。しかしながら私どもは呉や蜀(江蘇と四川)の人々が木版から[印刷した書物](印板文字)を売っているのを見ております。—略—もし経典を校訂し、木に彫って印刷するならば、学問研究に大きな恩恵となるでしょう。」
(『中国の印刷術 1 その発明と西伝』(東洋文庫 315)/F. T. カーター著 平凡社 昭和 5 2 年刊 p. 40・122)

とありまして、さらにカーター博士は、

「儒教経典が板木に彫られたとき、それは大規模な木版印刷のはじまりを示す事件であったが、仕事にたずさわった人々には特別に印刷をするという改まった考えがなかったことは明らかである。」(同 40~1) とし、そして

「印刷術は、明らかに馮道とその協力者たちが重要視しなかった事柄であった。それは副産物のようなものであった。彼らの関心のすべては、経典を校訂して永久不変のものにすることであり、」(同 p. 122)

と指摘なさっております。詳しく触れる時間はありませんが、中国で印刷の発明者とされております馮道は、実際彼が手懸けたこととは、今で言う「印刷」なのでは全く無く、木板に『経典』をただ雕刻致しただけの事。その目的は、長き伝統として、漢朝に倣い、『経典』を校訂して本来ならば伝統に則り、「熹平石経」に倣って「石」に彫って「石経」を造ることでありました。

ところが、國が疲弊して財政が乏しい為に、「石」を「木」に代えて木彫したと言う、たったこれだけの理由であったのであります。

つまり、**木彫**(木版)は「石経」の**代替品**であったと言うことであります。当時、呉や蜀では「**印板文字**」(翻訳では「印刷」となる)、つまり、すでに木版での摺刷が始まっていたと言うことでありまして、その印刷技法を利用(模倣)して、ただ単に「石経」の**代替品**として**木板**をもってそれに当てた(作製)という、たったこれだけのことであります。つまり、馮道は書物を印刷する意識は、当時一切持ち合わせていなかったと言うことであります。

やがて、宋の時代に入って参りますと、一紙に片面摺り、摺面を内側に折って「**冊子装**」の形態に装訂。これが「**北宋版**」となるものであります。この装訂こそが「**冊子装**」それも初期では「**蝴蝶装**」、「**パピルス冊子装**」で申せば、「**1シート二つ折の連続**」③の装訂と全く同様のものであります。

したがいまして、この「**冊子装**」(方形)こそが、中国の宮中で最初に公認されたと言うことになるのでありましょう。(中国での書物への現存最古の印刷は、咸通九年(868)『金剛経』卷子装)これも偶然にこの装訂を編み出したと**言うものではなく**、「**パピルス装訂**」③をそのままに**流用**(模倣)したものと見ております。

さて中国の四大発明の一つとされます「**印刷**」の絶対的特性(特徴)は当然のことながら、「**木版**」(整版)所謂「**片面摺り**」と**言うこと**であります。この「**木版**」とは現在の「**版画**」の技法でありますことをご存知のところではありますが、それは**版木**に墨を塗りその上に紙を置いて、**馬連で擦る**という技法であります。したがって、原則的には「**片面**」にしか摺刷出来ないという特性があるのです。中国で「**冊子本**」に摺刷する場合、当然「**片面摺り**」でありますので、中国での「**印刷**」の有効性は**片面使用**の「**卷子装**」と「**冊子装**」はあえて申しますと、三種の内「**パピルス冊子装**」③の形状に限定されると**言うこと**になりますのであります。(「**縫綴装**」は片面摺刷には不適)

と致しますと、中国の「**印刷**」技法は「**片面摺刷**」が絶対条件となりますので、**両面使用**の「**冊子装**」は、中国では「**一度だけ真ん中から二つに折るパピルス冊子装**」③のみが唯一適合した**ものとなるのであります**。

したがって、そこからは「**冊子装摺刷本**」として、摺刷面を内側に折る「**蝴蝶装**」がまず派生し、次で、その摺刷面を外側に折り出すと**言う**、「**パピルス冊子**」装訂過程の手順とは全く逆に、折り目側を綴じるのではなく、小口側を綴じて(四針眼・五針眼)「**摺刷本**」となす**という**、最終的には、形態は「**パピルス冊子装**」(方形)に倣いながらも、しかし**装訂**の過程には中国独自の「**片面摺り**」

に完全に適合させた「冊子装」を新たに開発した、それが所謂「線装本」、日本での呼称は「袋綴本」であったと云うことであります。

ただ、この「線装本」即ち「袋綴本」には「裏白」という、将に中國伝統の「卷子本」が持つ特性を兼ね備えているとも見えるのであります。そして、中國において、「印刷本」時代に入って参りますと、両面利用(書写)可能な「縫綴装」は、その機能にそぐわないという理由で、顧みられぬ装訂として、或は淘汰される憂き目に遭った装訂ではなかったかとも見て取れるのであります。

したがいまして、中國において、公式に導入されました「冊子装」は、「パピルス冊子装」③(粘葉装)の模倣でありまして、「線装本」(袋綴本)は、その「粘葉装」を木版印刷に適合させ、転訛させた、これこそ中國が唯一手懐けた「冊子装(胡蝶装)」であった筈と読み解いて見たのであります。

日本における「パピルス冊子装」形態の残存状況

いよいよ最終段階としての日本に到着致しましたが、日本における「冊子装」は一体どのような状況だったのでしょうか。

まず、日本における「冊子装」につきましては、西暦八〇六年(大同元年)、唐より帰朝致しました空海により、「三十帖冊子」が持ち帰られまして、現在その原本は「仁和寺」が所蔵致しておりますこと、すでにご存知のところであります。その装訂は「パピルス冊子装」③に属する、「一度だけ真ん中から二つに折る」装訂で、いわゆる「粘葉装」であります。

さて、日本の「冊子装」の残存状況を見て参ります前に、先に日本における「印刷本」と「書写本」両者の在り様を見ておきたいと思ひます。

まず「印刷本」では、「卷子装」は西暦一〇八八年(寛治二年)興福寺より刊行されました『成唯識論』(卷子装)が現存最古の摺経だとされておまして、「冊子装」の現存本では、西暦一二五三年(建長五年)高野版『三教指帰』とされ、その装訂は「粘葉装」であります。つまり、日本での書物への印刷は、平安朝末期頃に受容されたと云うことであります。

ところで、日本における「印刷本」には、実は「和様版」と「唐様版」の二種に仕分けされているのであります。この事柄につきましては、木宮泰彦氏は次のように記述されておられます。

「若し五山版以下の諸版を以て、唐様版と称すべくば、南都に於ける春日版以下の諸版は和様版の名を以て總括すべきものであろう。」(『日本古印刷文化史』/木宮泰彦著 富山房 昭和七年刊 同五十年三版 p.62)

との指摘がありまして、その二種別の理由はここには述べてありませんが、私が見るところ、日本における「装訂」と「印刷」に関わる注目すべき重要な事柄を含んでいるということでもあります。それを図式化致しますと、

「和様版」→「春日版・高野版」＝「卷子装」（巻き摺り）
＝「冊子装」（「粘葉装・縫綴装」両面摺刷）

「唐様版」→「五山版」＝「冊子装」（「袋綴装(線装本)・胡蝶装」片面摺刷）

ということになりましょう。

まず「和様版」とは、言わば、日本独自のものということになりましょうが、印刷方式は、「卷子装」（春日版）には「巻き摺り（書写方式）」を採り、「冊子装」では「高野版」がその代表格であります。その装訂の特徴は「パピルス冊子装」に倣った「一度だけ真ん中から二つに折る」③②方式「粘葉装」と「縫綴装」（綴葉装）の二種であります。さらに印刷方式は「両面摺刷」を特徴とし、「書写本」そのままに倣ったものであり、東洋では、勿論中国にはなく、その意味では、日本独自の方式となりましょう。

一方「唐様版」とは「五山版」を指しておりまして、ご存知のように、鎌倉時代から室町時代末期に、京都・鎌倉の五山とその系統を引く禅寺で開版されたものですが、その開版方法は、「宋・元・明版」をそのまま「覆刻」（おっ被せ）しておりますので、すべて中国の版式に倣っております為に、「五山版」の装訂はほぼ全て「片面摺刷」による「袋綴本」（線装本）であります。

いささか余談に及びますが、大変面白いことに、この「印刷技法」の導入に際しましては、西欧でも日本と全く同じ経緯があったことを想定されるものがありますのでご紹介致しておきます。これは先程引用致しました『書物の出現』「揺籃期本」の出現について、

「最初にはっきりさせておきたいのは、初期の活字本の見かけが写本とまったく同じであった事実である。この揺籃時代、印刷業者は革新をおこなうどころか、ひたすら写本の模倣をめざしていたのだ。—略—つまりひとつひとつが分離した活字アルファベットだけでなく、写本の書体と同じく連結線でつながった合字が長いこと使われていたことになる。—略—印刷技術者たちは手書きの書体をそっくり真似たいと願っていたから、接字符合（リガチュール）で結ばれた続き文字を一活字として鑄造していた」（『書物の出現 上』/リュシアン・フェーヴル、アンリ＝ジャン・マルタン著 筑摩書房 1985年刊 p. 161）

とありまして、西欧でも「書写本時代」から「印刷本時代」への移行期にあたって、「印刷機」を以て「活字」は「書写体」に似せて、「書写本」と見紛うほどの「印刷本」を作っていたと指摘。この結果を著者は「写本」と全く同一の「印刷本」であって、ひたすら「写本」の模倣を目指していたものであって、そこには何ら“革新”は見出せず。と酷評しております。はたしてそうなのでしょうか。当時西欧でも「パーチメント」に代わって「紙」の使用が始まっていて、「書物の装訂」は原則的には「パーチメント」方式の「四つ折、六つ折・八つ折等」であった筈ですから、著者は一切触れてはおりませんが、「書写本」の模倣と言うからには「両面印刷」が絶対条件となりますので、「片面印刷」の機能しか持ち合わせていない「印刷機」を以て「書写本」に似せて「両面印刷」する為には、まず「プレス」(印圧)技法の開発と言う工程を経ていた筈です。

「写本の模倣をめざす」ことに“革新”を見出せなかったとは、一体どう言う意味なのか私には見当が付きません。勿論以後は西欧では「書写本」は全て「印刷本」に取って替わられたのであります。

このように見て参りますと、中國で発明されました「印刷技法」(馬連摺り)を模倣するに致しましても、洋の東西を問わず、日本、西欧それぞれ「両面書写」を必須とする「冊子装」の伝統が「印刷本時代」にあっても尚、それを引き継ぐ(反映される)為に、努力し合っていたことは、偶然のこととは申せ、大変興味のあるところと感じております。

とは申せ、西欧での「両面印刷本」は「パーチメント冊子装」方式であるのに対して、日本ではこれとは別に「パピルス冊子装」③②方式による「粘葉装」と「縫綴装」(綴葉装)への「両面摺刷」本が現存致しているのであります。「木版」と「活字」の違いこそありますが、「縫綴装」の印刷本には、印刷時期が「南北朝」(1331～1391)とされており高野版『声明集』(天理圖書館蔵)は、西欧の「両面印刷」(1450年)より凡そ百年前後も早く、日本は世界に先駆けて逸早く「書写本」の形式であります「両面書写」を「印刷本」に採り入れていたのであります。

さて、現代の私共の書物への常識は「冊子装」で「両面印刷」は至極当然なこととして認識しております。しかし江戸時代までの東洋では、「木版摺」である限りにおいて、書物の形態は原則「片面摺」で「袋綴本」が主流であったこと、ご存知のところでありませう。

と致しますと、「和様版」における「冊子装」の「両面摺刷」が持つ存在意義とは、一体何だったのでしょうか。

元々日本人は、伝統的に「書写行為」を尊ぶという習慣がありますようで、中国の「木版摺」(片面摺)技法を以て、「冊子装」の印刷へは、あくまでも「書写」の形式に徹して、「両面摺刷」に拘ったと言うことでありましょう。「袋綴装」全盛でありました江戸時代にあっても、伏流水の如く、依然として「粘葉装・縫綴装」への「両面摺刷」が『和讃』など冊子本の中にも生き続けていたのであります。私もこの江戸時代中期以降の『和讃』二種を所持致しておりますが、印刷は「両面摺刷」、装訂は「一紙二つ折」による「粘葉装」と「縫綴装」の二つの方式であります。

では何故江戸時代まで「和様版」が存在していたのでしょうか。その背景には日本における「書物文化」の特異性にあり、「印刷」の技法が導入された後にも、『伊勢物語』や『源氏物語』等の「日本の古典類」全ては、室町時代まで印刷に掛けられることは一切ありませんで、全て「書写」によるものであります。又「整版」(木版)でさえも、「書写体」とされます「漢字・平仮名交じり連綿体」の使用は「古活字版時代」を待たなければなりません。そして「日本の古典類」が印刷され始めたのも亦、「古活字版」(文禄二年)以降でありました。

したがって、日本にあっては、「書物の文化(歴史)」を展望致します時、世界に類を見ない特徴を持っているのだらうと見ております。それは、平安時代後半に「印刷技法」を導入したのに関わらず、その対象は「内典」のみで、「日本の古典類」には及ぼさず、その一切は「書写」に拠っております。おおよそ五百年もの長きにわたって、「書写」と「印刷」とは並立に保たれて推移してきた経緯があるということです。つまり、西欧や中国とは異なり、日本では「書写」と「印刷」が共存していたのであります。例えば、天理図書館員岡嶋偉久子氏によりますと、寛政の改革を断行したことで有名な老中松平定信公は『源氏物語』(五十四帖)を七度も書写したという経歴の持ち主であるそうですが、事程左様に、「整版」(木版)主流の江戸時代にありましても、尚「書写本」がそこにはまだ「実用書物」として共存していたのであります。

ここまでのところ、日本における「冊子系」書物の残存状況を「和様版」と「唐様版」の中にその在り様を見て参りましたが、ここに含まれております「冊

子装」の形態、とりわけ「和様版」では「二つ折」した「粘葉装」と「縫綴装」(綴葉装)の二種が、江戸時代まで存在し、しかも「両面書写・摺刷」に共用されていたということでもあります。

したがいまして、この「冊子装」二種共存の状態で「実用の書物」としての残存状況は「書物の世界」では稀有の事柄ではないかと見ているのですが、如何でしょうか。

むすびにかえて

さてここまでの結論と致しまして、私が想い描いておりますことは、繰り返しになりますが、「冊子装」のルーツ、そしてそれは一紙二つ折による「パピルス冊子装」についてでありまして、その三種(③②①)の内主に二種の装訂が、日本にそのままの形態で定着しているのではないのか。それが他ならぬ「和様版」と呼ばれるそのものではないかということでもあります。

つまりそれは「書写・摺刷」共用(存)の時代を十九世紀まで持ち得た日本であったればこそ、「パピルス冊子装」の様式を直截に受容し、十九世紀まで受け継いできた装訂「和様版」、すでにそれは「博物館所蔵品」か、或は「考古発掘品」としてでしか見ることの出来ない「書物の装訂」、それこそ世界に類を見ない、“生きた化石”として、日本に伝存してきたのではないかとの認識を持っているところであります。さて如何でしょうか？ これを私の結論と致しまして終りと致します。大変お聴き苦しいものになりましたが、最後までご清聴戴きまして、真にありがとうございます。(‘08.8.23.) (‘10.8.13.加筆)

参考文献

- 1) 清水徹著『書物について その形而下学と形而上学』岩波書店 2001 年刊
- 2) 壽岳文章他著『書物の共和国』（壽岳文章しづ著作集第6）春秋社 1986 年刊
- 3) F.G. ケニオン著『古代の書物』岩波新書 D73 1953 年刊 1991 年 3 刷
- 4) F.T. カーター著『中国の印刷術 2 その発明と西伝』（東洋文庫 316）平凡社 昭和 52 年刊
- 5) 田中敬著『図書形態学』（田中敬著作集 第五巻）早川図書 昭和六十年刊
- 6) 岩村忍著『シルクロード—東西文化と溶炉—』日本放送出版協会（NHK ブックス；46）1966 年刊
- 7) 井上進著『中国出版文化史 書物世界との風景』名古屋大学出版会
- 8) 李致忠著「中国古代書籍史(抄訳)」(『書誌研のあゆみ 1976～1992』) 私立大学図書館協会西地区部会 阪神地区協議会 書誌学研究会 1992 年刊
- 9) リュシアン・フェーヴル、アンリ・ジャン・マルタン著『書物の出現 上』筑摩書房 1985 年刊
- 10) F.T. カーター著『中国の印刷術 2 その発明と西伝』（東洋文庫 316）平凡社 昭和 52 年刊
- 11) 木宮泰彦著『日本古印刷文化史』富山房 昭和七年刊 昭和五十年三版

【著者紹介】大内田 貞郎（おおうちだ さだお）

元神戸親和女子大学図書館長

現NPO法人書物の歴史と保存修復に関する研究会 理事

（関連著作）

- ・「東洋における書物装訂について—冊子受容の形態を中心に」
（『ビブリア』第 100 号[天理大学出版部、1993 年]）
- ・「東洋における書物装訂について—わが国への書物形態の受容と印刷の関係」
（『親和国文』第 28 号[1993 年]）
- ・『本と活字の歴史事典』共著（印刷史研究会編、柏書房、2000 年）